

ケアの人間学

合同研究会要旨集

No.5



2008年3月

目次

まえがき	浜渦 辰二 (2)
話すこと・食べること ——人間らしく生きることのサポート——	五十嵐明美 (4)
最後まで人として ——ケアとしてのエンゼルメイク (死化粧) ——	名波まり子 (6)
栄養相談業務に求められるコミュニケーションスキル ——栄養士養成課程におけるコミュニケーション教育の一方法論の提案に向けて——	杉本富士子 (8)
看護教員の看護学実習における学生指導の体験世界 ——看護学実習指導の原点を探る——	田中 悦子 (10)
ドラマセラピーの可能性 ——想像の世界が与えてくれるもの——	中野左知子 (12)
スピリチュアリティと死の恐怖からの解放	吉野 吾朗 (14)
人口減少地域における在宅終末期療養に関する住民意識とケアニーズ	浅見 洋 (16)
静岡医療コミュニケーション研究会 ——その活動と役割について——	森田みつ子 (18)
よりよいケアのために ＝決定の自立支援＝	備酒 伸彦 (20)
見学報告① 「ぴあクリニック」	(26)
見学報告② グループホーム「ケアクオリティ草薙」	(30)
見学報告③ 「たんぼぼ診療所」	(32)
研究会の記録	(34)

まえがき

浜渦 辰二

私たちの研究会も5年間続き、この『ケアの人間学—合同研究会要旨集—』も、No.5を発行できる運びとなりました。2月発行予定がすっかり遅くなってしまい、早く原稿を出して頂いていた方々には深くお詫び申し上げます。本号も、ケアのさまざまな現場で、さまざまな分野で、さまざまな角度から取り組んで、日々いろいろと問題を抱えながら考えておられる方々のお話を伺うことができ、お互いに異なる立場からの意見を交換しあえる場の記録となったことを、嬉しく思っています。

ウェブページ (<http://anthropos.hss.shizuoka.ac.jp/care/care-home.htm>) に、研究会の案内と記録を掲載してきておりますが、そこには、関連する講演会・研究会・講習会等々の企画も紹介しております。この1年間にご案内したものを数えてみますと、ちょうど昨年度と同じ26件の企画がありました。例えば、静岡県ボランティア協会主催の「ケアする人のケア」を学ぶ会、緩和ケアあるいはホスピス関係の講演会・研究会・セミナー、たんぼぼの会、文科省科学研究費を使った企画などについても、あわせてご案内して参りました。さまざまなネットワークができてきていることが分かります。

そういうネットワークから生まれたこととして、何よりもまずご披露したいのは、私たちの研究会を紹介する小文として、拙稿「死生観を育てよう：「ケアの人間学」合同研究会」が、『臨牀看護』(Vol. 33, No. 13, 2007年11月、へるす出版)の「第1特集 死生観と看取り」に掲載されたことです。そこでは、日本各地で行われている「死生観を育てる」ための研究会が四つ紹介されていますが、山崎章郎氏の「日本死の臨床研究会」、島菌進氏の「死生学の展開と組織化：東京大学大学院人文社会科学系研究科グローバルCOEプログラム」、浅見洋氏の「死生観とケア」公開研究会」と並んで、私たちの「ケアの人間学」合同研究会を紹介することができました。静岡の地で続けてきた活動が、全国誌で紹介され、全国的に知られることになった次第です。

また、私が関わっている三つの文科省科学研究費による共同研究とも連動する形で、ネットワークが広がったことも、この1年間の成果として特筆すべきことです。第一に、「対人援助の倫理と法」(代表：浜渦)が、9月に静岡市産学交流センターにて公開シンポジウム「対人援助の倫理と法」を開催し、また、12月に備酒伸彦氏の講演会「よりよいケアのために＝決定の自立支援＝」を後援いただきました(詳しくは、報告書『対人援助の倫理と法』第3号を参照)。第二に、「応用現象学」(代表：榊原哲也)の第2回会議(立命館大学にて)の第2部「ケアの現象学」で、看護の現場におられる方々と現象学研究者たちとの対話を実現することができ、私たちの研究会のメンバーからも参加して下さった方がいました(詳しくは、『フッサー研究』第6号)。第三に、「薬の倫理学と薬剤師の倫理教育」(代表：松田純)では、6月には鈴木勉氏(日本緩和医療薬学会理事長)による公開講演会、9月には国際シンポジウム「医療薬学の歴史と文化」などにも、研究会としても後援団体として名を連ねさせて頂きました。

さらに、私たちの研究会と関連するような静岡大学大学院の授業もいくつか行いました。一つは、院生たちを連れていくつかのクリニックや施設を訪問・インタビューさせて頂いていただいたことです。本誌No.4では、「スリーA予防デイサービス折り梅」見学報告

を掲載させていただきましたが、本号では、「ぴあクリニック」、グループホーム「ケアクオリティ草薙」、「たんぼぼ診療所」の見学報告（院生執筆）を掲載させていただきました。もう一つは、大学院公開授業として、加藤正人氏（中外製薬㈱社会責任推進部）に講義「製薬会社の社会的責任（CSR）への取り組み」、及び、荒井恵二氏（株式会社スギ薬局取締役）に講義「どうなる日本医療?! 医療構造改革の行方」をお願いすることができました（前述報告書『対人援助の倫理と法』第3号に資料掲載）。

そうした繋がりの中、私自身も次のようないくつかの発表、講義、講演をする機会を与えられました。まずは、日本哲学会第66回大会（5月、千葉大学）：共同討議Ⅱにて、「生・死とケアの哲学」という発表をする機会を与えられ、発表原稿も「生と死をケアすること—ケアの現象学的人間学から—」として、日本哲学会編『哲学』No. 58に掲載されました。日本哲学会の共同討議で「ケア」というテーマが取り上げられたのは初めてで、哲学研究者たちにもこういうテーマへの哲学的アプローチの必要性を訴えることができたかと思えます。また、『緩和ケア』（青海社）9月号の特集「尊厳って何だ？ 希望って何だ？ —緩和ケアへの現象学的アプローチ」には、拙稿「緩和ケアと尊厳—ケアの現象学的人間学からのアプローチ—」を掲載していただきました。この小論がきっかけとなって、12月には日本看護協会神戸研修センターの企画で講演「医療従事者としての倫理」、今年の1月には第110回ホスピスケア研究会で講演「緩和ケアと尊厳」、そして、2月には愛生会看護専門学校にて卒業記念講演「現代医療における看護の力—ケアの人間学から—」をさせていただきます。さらに同じ2月、昨年度の静岡校に続き、今年度は三島校にて、放送大学面接授業「ケアの人間学」を開講いたしました。これらもすべて、先に述べたようなネットワークの中、生まれたことです。

また、私自身がいくつかの企画に参加することができたことも、関連してお伝えしたい収穫でした。一つは、5月に県ボランティア協会の「ケアする人のケア」を学ぶ会の企画で、松本・神宮寺の尋常浅間学校の100回目の授業と閉校式に参加できたこと、二つ目は、11月に視察研修「北欧の福祉サービスと日常を感じる視察研修旅行」（オーガナイザー：備酒伸彦氏）に参加できたこと（前述の報告書所収の拙稿「高齢者の倫理と法をめぐって—北欧の高齢者ケア視察研修報告」参照）、三つ目は、北海道浦河町にある精神障害等をかかえた当事者の地域活動拠点「べてるの家」を訪問できたことです。

さて、前号で御案内しましたように、本研究会では会員・会費制が導入され、本誌No. 5も、会費を納めて会員になっていただいた方にのみお送りしています。今後とも、会員になっていなくても、研究会に参加していただいて構いませんし、メールアドレスを登録されておられる方にはメールの案内をいたしますが、本誌をお送りすることと、メールアドレスを持たない方に葉書で研究会の案内をすることとは、会員になられた方だけに制限させていただきますので、ご承知おきください。年会費は一般会員2,000円、賛助会員5,000円です（郵便振替口座：00880-1-186850 「ケアの人間学」合同研究会）。

最後に、私事ではありますが、私、この4月1日より、長年教壇に立ってきた静岡大学を離れ、大阪大学大学院文学研究科（臨床哲学講座）に転出することになりました。しかし、家族の問題もあり、当分は単身赴任となり、毎週土曜日から月曜日までは静岡で過ごす二重生活となります。したがって、いつも土曜日に開催しているこの研究会の活動には、何らさしつかえはありませんが、ますます皆さまのご協力を仰ぐことになると思っています。今後とも、ご支援のほど、よろしく、お願いいたします。

（「ケアの人間学」合同研究会幹事）